

平成20年 2月18日

伊勢市長 森下 隆生 様

伊勢地区地域審議会
会長 櫻井 治男

新市の一体感の醸成について（答申）

平成18年10月10日付け18政第577号で諮問のありました「新市の一体感の醸成について」について、別紙のとおり答申します。なお、新市の一体感を醸成するためのアイデア集を作成しましたので、あわせて提出します。

答申書

伊勢地区地域審議会

はじめに

旧4市町村が合併した背景には、地方分権の進展や、人口減少、少子高齢化などの社会情勢と経済状況、国、地方を通じての厳しい財政状況など全国的に共通する環境の変化のほか、大都市への人口流出や、この地域の経済的なぜい弱さに起因する都市機能の衰退という状況があります。単独の市町村としては存続が困難でありその機能を合併により高めるという目的を認識し、行政も市民も厳しい時代状況に危機感を持って臨む必要があります。このような認識のもと、以下のとおり答申します。

1つの目標 新しい伊勢市に一体感を生み出す

平成17年11月に新しい伊勢市が誕生し、約2年が経過しました。その間、少しずつではありますが、時間が一体感を生み出してきています。しかし、時間だけに一体感の醸成を委ねておくわけにはいきません。地方が、地方の魅力をもって活性化していくことが求められている今の時代において、積極的に市民が主体となり、力を合わせてまちづくりを進めていく必要があります。

この答申は、新しい伊勢市が一つになり、さらに元気なまちとなっていくことを目標とし、そのために伊勢市と市民が取り組むべき方向性と認識を提案するものです。

2つの基軸 歴史と生活圏

合併後に、いくつかの地区で新たに奉曳団が結成され、新しい伊勢のまちとしてお木曳が行われました。これは、この地域が「お伊勢さん」を中心とした歴史を共有し、その長く深い歴史に育まれてきたまちであることを物語っていると言えます。一方、モータリゼーションの発達に伴い、就労や娯楽や消費行動といった市民生活は、今回のまちの合併を待たずしてすでに一つの生活圏を形成してきたといっても過言ではありません。このように、合併した4つのまちは、合併前から歴史と生活圏（時間と空間）を2つの基軸とし、強く結び付

いていたと言えます。

今後、一体感を醸成するに当たり、4つのまちを貫く2つの基軸を中心に考えていきます。

3つの視点 調和・継承・展開

一体感の醸成に当たっては、新しい1つのまちとして統一すべきものは調和を保ちながら統一し、同時に、これまで培われ継承されてきた各地区の伝統や文化などは貴重なまちの財産として保存や活用を図り、そして、それぞれの良いところを融合して展開させ、新しい伊勢市をつくりだしていかなければなりません。その過程では、時にはぶつかりあうことも必要であり、対抗や拮抗を乗り越えることで一体感が醸成されていくと考えます。

今後、人口減少、少子高齢化が進行する中で、まちの活力を生み出していくためには、行政運営への市民参画や情報公開、市民活動に対する支援、分権型社会の構築、コミュニティの形成や地域振興が不可欠ですが、これらの課題の解決や取組を進めていくについては、上記の3つの視点が大切であると考えます。

4つの主体 市民、企業、行政、協働

新しい伊勢市は、4つのまちの行政組織が1つになることによって生まれしました。行政組織がこれまでの4つの枠組みを残したままであれば、一体感を生み出すことは難しくなります。新市の一体感の醸成の大前提は、まず、新しい行政組織である市役所が、従来の枠組みを超えて1つになることです。同時に、より透明で効率的な市役所となることも不可欠です。最終的に、市民と信頼できる関係、相談と支えあう関係を構築していくことが求められます。

そして、そのような信頼を土台に、市民は今まで以上に主体的に動くことが、企業や教育機関などもまちづくりの主体であることを強く感じ、地域社会に貢献していくことが、それぞれ求められています。まちづくりにおいて最も重要な役割を担うべきは一人ひとりの市民であり、行政は市民に活動の機会を提供し、市民が活動できるように動かなければなりません。一方、市民も従来の枠組みを超えて新しい伊勢市のまちづくりの主体であることを自覚し、自分たちの力を発揮して、活力を行政に向けていく必要があります。さらに、市民、企業・教育機関、行政が1つの協働を形成し、4つの主体となって既存の枠を超

えた新しい地域社会を形成し、まちづくりを進めていくことが必要と考えます。

5つの方策

以上のことから、新しい伊勢市の一体感の醸成のために、次の5つの方策が必要です。

まちのシンボルとしての伊勢市駅前整備を通じた一体感の醸成

伊勢市駅前、伊勢のまちの「市街地」としてしっかりとした発展が大切です。これは生活圏という基軸でつながった4つの地区の共通の想いであると考えられます。伊勢市駅前の整備については、単なる旧伊勢市の駅前整備という位置づけではなく、新しい伊勢市のシンボルと位置づけ、整備を進める必要があります。

環境対策を通じた一体感の醸成

住んでいる地区が違って、まちを流れる川や海はつながっています。そして、川や海を大切にしたいという想いは地区を超えたものです。どの地区でも共通の関心事である環境について、各地区で取り組むことで共通の目的を持ち、それが市全体の取組となることで一体感の醸成につながっていくと考えられます。よって、市全体で環境に対する取組を一層進める必要があります。

産業振興を通じた一体感の醸成

新しい伊勢市が元気なまちになるためには、もっと若者の働く場所が必要です。若者が働くことができ、このまちに定着することができるような産業の振興を行うことで、生活圏を同一にする4つの地区が活性化し、一体感が醸成されと考えられます。

また、この地域の歴史ある伊勢というネームバリューを活用し、伝統産業をはじめとする「これは伊勢」「さすが伊勢」というものをPRし、拡大していくことで、一体感を醸成できると考えられます。

公共施設の利用を通じた一体感の醸成

4つの地区は、それぞれの公共施設を持って合併をしました。これらの施設が相互に利用され、また、市民が施設の管理運営に参画することで、市民の交流が生まれます。そうすることにより、人が行き交い、一体感が醸成されと考えられます。

また、それぞれの地区や団体の活動が一堂に会する場所があれば、ネット

ワークがつくられ、個別の活動がつながっていくと考えられます。

地域コミュニティを通じた一体感の醸成

地域のコミュニティの活力が落ちてきています。また、地域間と地域内のつながりが希薄になっています。一方で、これからのまちづくりには、自治会をはじめとする地域コミュニティの力が不可欠です。市民が自分たちのできることは自分たちで行い、行政は地域コミュニティ間の橋渡しや、地域コミュニティをバックアップすることで、地域コミュニティを活性化しなければなりません。そして、各コミュニティが市全体を意識し、身近なところで一体感を積み重ねることで、全体の一体感へつながっていくと考えられます。

以上の方策について、一体感の醸成のために取り組まれるよう答申します。

以上

一体感の醸成のための具体的なアイデア集

全市的会合の持ち方

旧行政区域にとらわれない会合

市政に関する協議会、審議会、自治会長会議等はすべて旧市町村別に行わず、一堂に会して実施します。

現在のように旧市町村別の会議をしてはいつまでも真の意味での一体感は育ちません。

施設の利用方法の工夫

大きな講演会・イベントなど文化会館だけでなく、小俣町、御園町、二見町に存在する文化施設を利用し、開催します。旧市内の人でも、過去には訪れることの少なかった町や施設を知ることになります。

活動のネットワーク構築

さまざまな活動が行われていますが、それぞれの活動を結び付けるネットワークが必要です。活動を結ぶネットワークを構築します。

新たな仕掛けやイベント

「わたしの家はB&B」運動

式年遷宮を控え、国内外から多くの人々が伊勢を訪れることが予想されます。旅館やホテルも受け皿として重要ですが、伊勢市民の心意気として、家庭を宿泊場所として提供することをもっと進めてよいと思います。その場合に従来方のホーム・ステイではなく、空き部屋があれば、あまり手間のかからない、格安でベッド(寝場所)とブレックファスト(朝食)だけを提供するB&Bの設置を展開してはどうでしょうか。食事提供と宿泊料徴収ということで、制度的な課題があるかもしれませんが、伊勢市は特別区として認められるようなことを試み、市民が「もてなしの心」をそうした形で示すことも「伊勢だけ」で行なっているという一体感が生れるかもしれません。

奉曳団対抗仮装スポーツ競技

お木曳き行事を機会に新たな奉曳団が結成されたり、弱体化した団では手伝い関係が生まれました。こうした機運を活用して、「おおまつり」での初穂曳きとは別に、気軽に(仮装して)参加できるスポーツ競技(例えば、内宮・外

宮の堺である倉田山あたり、あるいは宇治・山田の地域での綱引き大会)を新しく始めてはいかがでしょうか。

「看板修景」活動

大掛かりなことではなく、さまざまな看板・案内板が林立し町としての統一感にかけています。伊勢らしい雰囲気、調和のとれた景観となるように市民、企業、行政等で取り組んではいかがでしょうか。

施設・史跡紹介

各町の施設・史跡あるいは活躍している人などを紙面で（行政的でなく柔らかい方法で）広報します。例えば、伊勢のページ・小俣のページ・御園のページ・二見のページのように、地区ごとに掲載します。

伊勢市のキャラクター（イメージマスコット）づくり

伊勢を表すキャラクターを各地に散在（施設に張ったり、幟をたてたり）し、伊勢市の何処にいても同じキャラクターを目にすることで、みんなが同じ伊勢市民であることを潜在的に意識するようにします。

アイデンティティを高める

新市のアイデンティティを高めるための事業を実施します。

子供から高齢者までが楽しめるイベントの開催

様々な世代の市民が楽しめるイベントを、サンアリーナ、競技場、大仏山公園、御園ラブリバー公園などで開催します。

伊勢の伝統芸フェスティバルの開催

御頭神事・手筒花火・木やり・かえる踊り・カンコ踊り・能(一色町)など伝統文化を通し、伝統芸をみんなで楽しみながら、地域交流を図ります。

伊勢のおいしいもん大発見まつりの開催

「食べて知って買って」、地産地消クイズ等で豪華賞品(企業協力)を獲得！地産地消をコンセプトにしたイベントを開催します。

市民体育祭の開催

誰でもが参加できる種目を考え、市民体育祭を開催し、楽しみます。

危機意識の共有の持ち方や内容

市政に関する公聴会・行政モニター・アンケートの実施

市民の生の声を聞き取ることができ、一体化を図るための手段を見いだすことができる市政に関する公聴会や行政モニター・アンケートを実施します。知事の本音でトークが実施されていますが、あのような企画も必要です。

協働

市民、企業、市民活動団体が共有できる姿を決めて、一緒にやっていけるものを探していかなければなりません。

自治会への資金交付

自分たちでできることは自分たちで行わなければなりません。その仕組みづくりとして、行政から自治会などへ資金を交付します。

自治会の育成

自治会の組織力、活動力は様々なのが現状です。自治会を育成していくことが大事です。

市民が具体的に取り組めること

公共施設の維持管理に参加

花の植栽など、公共施設や公共空間の維持管理に市民が積極的に参加できるようにします。

あいさつ

人とのコミュニケーションでお金がかからないものは、あいさつです。地域においても同じことが言えます。あいさつをして、コミュニケーションを生み出すように働きかけます。

その他

市職員・教職員の積極的な人事交流を行う

旧伊勢市・旧二見町・旧小俣町・旧御園村等のブロック内だけの人事異動では意識面での一体感が育ちません。特に教職員の思いきった異動が必要です。

新伊勢市民として誇りのもてるシンボリックなものを新設する

例えば駐車に不自由しない広いスペースをもつ庁舎で、バスが玄関口に停車し、老人や身体不自由者が気軽に立ち寄れるもの（歴史館・美術館・博物館 etc.）を建設します。

路面電車の復活

新しい交通システムを作って、路面電車を復活させます。

伝統産業・地場産業の支援

伊勢に根付いている伝統産業、企業の経営改善を支援する必要があります。伊勢のものを売っていくための支援、売るための情報発信を支援します。